report.3

竹田食育ツーリズム研修

reported by 谷口 未樹、西 由紀子（情報コミュニケーション学科・２年）

７月に竹田で農家民泊が行われた。２、３人のグループに分かれて宿泊し、饅頭作りや竹細工などさまざまな農家体験をした。また２日目にはとうきび早朝収穫体験をし、とうきびフェスタのイベントスタッフとして参加した。これらの活動を通し、竹田市の魅力を情報発信しようと考え、竹田市と芸文短大、宿泊客の相互間のやりとりができるものを目的としたホームページ「たけたみつけた。」が作成された。

１１月と１２月には竹田市の方を講師に招き、郷土料理を習ったり、お話を聞いたりすることで、スローライフをすすめるスローライフ講座が行われた。スローライフ講座では、味噌玉作り体験やとうもろこしを使った郷土料理体験などを教わった。

私は今回発表を聞いて、地域の方々と交流することで日常生活ではできない貴重な体験ができることを知った。

written by 河野 莉未（情報コミュニケーション学科・１年）

report.5

大分七夕まつり

reported by 笠村 絢、中原 聡乃、宮崎 ありさ（情報コミュニケーション学科・１年）

８月６日(金)から８月８日(日)までの３日間、大分市街地で開催された大分七夕まつり。本学からも約８０名の学生が７日(土)に行われた七夕ブロードウェイに参加した。

当日は朝１０時に城址公園に集合し、例年通りバルーンリリースのための風船作りの手伝いや、最終打ち合わせと準備を進めた。今年初の企画である特設ステージ付近では、かき氷や輪投げなど、子どもたちが楽しめる模擬店を出店し、会場を盛り上げた。また、バルーンリリースも風船が夜空に向かって飛んでいく様子がとても感動的で、今年の七夕まつりも大成功に終わった。

written by 佐藤 早紀（情報コミュニケーション学科・１年）

report.7

環境活動

上野の森の会

reported by 小田 麻衣子（国際文化学科・２年）
佐藤 維花（情報コミュニケーション学科・２年）

キャンドルナイト

reported by 楠本 愛（国際文化学科・２年）
荒木 夏穂（情報コミュニケーション学科・２年）

上野の森アートフェスティバル

reported by 相馬 志織、秋月 愛奈（情報コミュニケーション学科・１年）

環境活動では、上野の森の会、キャンドルナイト、上野の森アートフェスティバルについて紹介された。

上野の森の会の活動では、地域の人と協力して苗木を植えている。「森で見つけた植物の名前も教えてくれる」と活動の楽しさを伝えた。また、芸文短大で行われたキャンドルナイトは、竹田のライトアップ「竹楽」の竹灯篭を使用しているそうだ。「キャンドルナイトの認知率が低いので、さらに多くの人に知らせていきたい」と語った。最後に、上野の森で行われたアートフェスティバルについて報告され、芸文短大生が子どもたちと一緒にエコバッグを作ったことが写真を交えて紹介された。

フリーリーの梶原陽子さんは発表後、「身近な活動で参加しやすくコミュニケーションの場になっている」と、これらの活動を評価していた。

来年度も多くの学生が参加することを期待したい。

written by 井原 遥香（情報コミュニケーション学科・１年）

report.4

SAEMON23

reported by
成松 美由紀（2年）、稗田 結菜（1年）、佐田 伊都美（1年）、上尾 美咲紀（1年）（4人とも情報コミュニケーション学科）

SAEMON２３は加藤清正公を祀る法心寺の二十三夜から始まった。この祭りでは、①ECOステーション(祭会場のゴミ拾い・祭の広報・宣伝・Tシャツ作り)、②ワークスペース(うちわ作り・模擬店)、③ダンス(鶴崎踊りをアレンジした振り付けの考案・Tシャツのデザイン作成)の３部門に分かれた。発表者はどの部門もみんなで意見を出し合い作り上げ、やり遂げたという達成感を感じることが出来たと述べていた。そんな中でもやはりそれぞれの部門ごとに反省点がでたようだ。①ゴミ回収時の場所や分別の分かりにくさ、ゴミ袋の不足、②いす不足、③練習期間の短さによる練習不足などが挙げられた。この反省点を生かし、発表者はサークルにして引き継ぎが円滑に進むようにすることを提案し、一年間という期間の中でより良いものを作り上げようという結論に至った。長い期間を通して交流することで、鶴崎の人達との絆もより深めることも出来ると述べていた。

written by 丸野 由貴（情報コミュニケーション学科・１年）

report.6

長湯温泉♨日韓短編映画祭

reported by 森本 絵美莉、吉弘 梓（情報コミュニケーション学科・２年）

この映画祭は昨年の１１月１２日～１４日の３日間にかけて、竹田市長湯温泉で行われた。芸文短大生が中心となって開催し、約５０人のスタッフと地元・NPO団体の協力で成り立っている。チケットは全国から韓流ファンが殺到し、約３時間で完売するという人気ぶりを見せた。

今回の活動を通して良かった点として、地域活性化に繋がったこと、スタッフ自身の成長が出来たことを、悪かった点として、スタッフ間のコミュニケーションがとれなかったこと、臨機応変に動けなかったことを挙げた。写真や動画を交え、楽しさが伝わってくる発表だった。

written by 木許 麻衣（情報コミュニケーション学科・１年）

interview

(有)オーシャン企画

堀米 京子 氏

「若い原動力から生み出す地域活性化」

「学生達の力を活かし、地域の活性化を図るという活動は社会に出るとなかなか難しいものだ。ナラティブという"自分自身の物語"から課題を見つけ、その統一したキーワードから人と人とのコミュニケーションを広げてゆく。それはやり甲斐や幸せ、今まで知らなかった自分の一面を見出だすきっかけにも繋がる」と語る。また、「"何のためにそのような活動をするのか"という意識を個々が持ち、物事の終始の流れや裏付けをより明確化して活動に取り組むことで、サービスラーニングの活動はさらによいものになると思う」と助言して頂いた。すべて物事には意味があり、その裏付けを理解する力は社会に出てからも大切なことなのだと思った。

written by 佐藤 由樹（情報コミュニケーション学科・１年）

interview

天瀬グリーンツーリズム研究会
会長

松浦 吐四郎 氏

「芸短大生の活動力は力強い！」

松浦さんは、今回の地域活動フォーラムを通して、改めてナラティブやサービスラーニングの意味を理解したそうだ。また、七夕まつりの発表を聴いたときは、「自分が２５年前にボランティアでお祭りの風船を膨らましたことを思い出して嬉しかった」と目を輝かせて語った。

芸文短大生の活動力は凄い！と感心された一方で、なぜその活動を選んだのかをもう少し明確に知りたかったという。「今後は与えられたものだけに参加するのではなく、自分から興味を持ち、活動してみたいことをどんどん提案していったらよいのではないか」とご指摘いただいた。

written by 大谷 蘭子（情報コミュニケーション学科・１年）

interview

大分青年会議所

三宮 康司 氏

「発表のまとまりは大切。きっかけも大切。」

「全体的にきれいにまとめて発表できていた」と三宮さんは語る。中でも竹田食育ツーリズム研修の発表については「過疎地域での新しい考え方、見方を取り入れた情報発信というのは印象的だった」とのこと。しかし、「今回のフォーラムは発表のきっかけはどこにあるのか、その後どうつなげていくのかの説明が足りなかった」と問題点を指摘。「１つの事柄を端的に発表し、起承転結に気をつけると良くなる」と今後のアドバイスを頂いた。このような学生発表に関しては「自分が感じたことを人に伝えるにはどう展開していくのがよいか、どう理解してもらおうかを考える場所が学生生活にあるのはすごく大事」と芸短の取り組みを高く評価しているようだった。

written by 太田 有里紗（情報コミュニケーション学科・１年）